

2017年6月18日 礼拝メッセージ

聖書：第一列王記1章41～53節

説教：主は王座に着く者を与えてくださった

あらすじ

ダビデが高齢となり体が不自由になったとき、息子のアドニヤはある日突然、父親の許可を得ずに、「今日から私がイスラエルの王となる」と宣言しました。ダビデ亡き後、だれが次の王となるのか、ダビデは何も言っていなかった。そのわずかのすきを突いてのことでした。

アドニヤがクーデターを起こしたとの情報をいち早くキャッチしたのは、預言者ナタンでした。彼は、バテ・シェバとともにダビデの所に大急ぎで向かい、次の王をいまずぐ指名するように説得します。ダビデは最初何が起きたのかよく飲み込めなかったようですが、やがてことの重大さに気がつき、バテ・シェバの子であるソロモンに王座を譲るとの約束します。そしてすぐに、三人の信頼できる部下を呼び、今日これからギホンに行つてソロモンの王位就任式を行うようにとの命令を下し、就任式の手順について細かな指示をした。それが前回までのあらすじでした。

1 ヨナタン

1) アブシャロムが反乱を起こしたとき

アドニヤはこのとき、エルサレムの町の南外れにあるエン・ロゲルの近くで政府の要人を招いて盛大な就任パーティを開いている最中でした。ちょうど料理を食べ終わったとき、都のほうから角笛が聞こえてきて、そのうちにだんだん都が騒がしくなっていきます。

なんだろうかと話しているうちに、ヨナタンがやって来ました。彼は何者であるのか、すこし説明が必要です。話は過去にさかのぼり、ダビデがまだ元気だったころのことです。今日の箇所と似たような事件ですが、次男のアブシャロムが反乱を起こしたことがありました。ダビデはアブシャロムから逃れるためにエルサレムから脱出するとき、ヨナタンに対してエルサレムにとどまるよう命令します。そのヨナタンは、アブシャロムが父ダビデを追ってすぐに出陣するとの情報を密かに手に入れ、いのちをかけてダビデのところに伝えに走ります。その結果、ダビデは危機一髪難を逃れることができました。ヨナタンはそのようなことをした人です。

それがどうして今、アドニヤのところに来るのでしょうか。ヒントがあります。ヨナタンが何度も「私たちの君、ダビデ王」と言っています。ヨナタンはアドニヤに寝返つたのではありません。ダビデの側につきながら、わざわざ知らせを携えて来たのです。なぜ彼は来るのか。そのことはまた最後のところで触れます。

2) ソロモンが王の座に着いた

ヨナタンの報告は43節以降で、ダビデ王はソロモンを王としましたと、第一報を告げます。それに続いて、ソロモンがダビデ王の雌驪馬に乗って行進したことに触れています。本来なら、ソロモンの王位就任式にダビデが出席することで、人々はソロモンがきちんとした手続きを踏んで王になったこと

を認めることができます。けれどもダビデは体が不自由なのでできない。そこで、ソロモンをダビデの雌驃馬に乗せることにします。そうすることで、ダビデが正式にソロモンを次の王に指名したことがわかるからです。実際、人々はダビデの雌驃馬を見てソロモンを正式な王であると認めました。そればかりではない。ダビデの部下たちも次々とソロモン支持を表明していきます。それで町中がお祭り騒ぎになります。

2 アドニヤ

1) 支持者たちが離れて行く

この知らせを聞いて、真っ青になったのはアドニヤのパーティに出席していた人たちです。最初、アドニヤから王位就任式の招待状を受け取ったときは大喜びでした。世の中には「勝ち馬に乗れ」という格言があります。アドニヤという勝ち馬に乗ることができれば、すばらしい地位や富を得ることができると期待して駆けつけました。しかしいまや勝ち馬どころではありません。アドニヤのそばにいるということだけで、これからの人生は不利になるばかりです。人々はアドニヤを捨てて、まるで蜘蛛の子を散らすようにしてみな帰ってしまいました。

2) 祭壇の角をつかむ

こうしてアドニヤの計画は完全に覆されてしまいました。彼はどうしたか。すぐにソロモンは自分を殺しに来ると考えます。なぜそう考えたのでしょうか。自分が先ほどまでそう考えていたからです。計画を達成するためには、邪魔者であるソロモンとその母バテ・シェバを消す必要がありました。ところが立場が逆転してしまった今、今度は自分が狙わ

れる側になったと考えます。

そこで彼の取った行動。契約の箱が置かれていた天幕に走り、祭壇の角をつかみ、ソロモンが自分を殺さないようにと叫びます。どうして祭壇の角をつかむのか。出エジプト記 21 章 12, 24 節にこうあります。「人を打って死なせた者は、必ず殺されなければならない。ただし、彼に殺意がなく、神の御手によってことが起こされた場合、わたしはあなたに彼ののがれる場所を指定しよう。しかし、人が、ほしいままに隣人を襲い、策略をめぐらして殺した場合、この者を、私の祭壇のところからでも連れ出して殺さなければならない。」

例えば、殺人事件を起されば犯人は裁判にかけられ、証拠を集めて審理が行われ、判決が出されて初めて被告の処罰が決定します。判決が出るまではたとえひどい罪を犯したとしても、被告が殺されることはありません。今では当たり前の制度ですが、もとをたどればすでにこの思想は、出エジプト記の中に示されていたのです。

アドニヤはこのみことばを根拠にして祭壇の角をつかみ、自分は裁判を受ける権利があると主張しました。

3) ソロモン王の前に来て礼をした

さてそのアドニヤが呼ばれ裁判にかけられます。この裁判は非常にシンプルです。アドニヤがソロモンのところに連れて来られたとき、なにをやるか。ソロモンはそこに注目します。そうしたら彼は王に頭を下げた。ソロモンに逆らいませんという態度を見せます。

3 神

1) ソロモンのことば

ソロモンはこれを見て、「家に帰りなさい」との判決を下します。その時こう言っています。52節。「彼がりっぱな人物であれば、彼の髪の毛一本でも地に落ちることはない。しかし、彼のうちに悪があれば、彼は死ななければならない。」

今のことばで言えば執行猶予の判決です。本当に悔い改めたのかどうか、しばらく様子を見ることにします。それでどうなったか。結局、このあと彼はソロモン王に逆らおうとします。そして殺されていきます。ここでは頭を下げてはいますが、心の内に悪があったと言うことになります。でも、そのことは外側からは見えるわけではありません。ですからそれ以上は追求しない。そのままとします。でも悪はいつか表に必ず現れてきます。そのとき神はさばきを行われます。

2) だれがりっぱな人物なのか

こんなことを言うと、神は私たちの心の内を監視している、恐ろしい。そんな神はいらないと言う方がいます。

話は逆さまなのです。そもそも、どうして神に自分の心を知られることが恐ろしいと感じるのでしょうか。私たちの心がりっぱであるというのなら、何もこわがることはないでしょう。神が恐ろしいということは、実は、自分の心にはやましいものがある、よくないことがあると、自ら認めていることになります。

では、聖書は私たちに、りっぱな人物になれと言っているのでしょうか。努力してよい人になれるのなら、だれも教会に来る必要はありません。教会はがらがらになるはずで、ところが、今日ここにはたくさんの方が座っ

ています。おかしいですね。なぜ皆さんここに座っているのですか。自分はりっぱな人物であると思っている人はここにいないはず。反対に、自分のうちには悪があると認めているから座っている。でももしそうなら、ソロモンが言ったことはどうなるのか。「彼のうちに悪があれば、彼は死ななければならない。」悪があるのなら死ぬことになるはず。それでも教会に来るのはなぜでしょうか。

3) ダビデは礼拝した

ダビデがソロモンに王位を譲ったとき、こう語っていたことに注目します。48節。「きょう、私の王座に着く者と与えてくださって、私がこの目で見られるようにくださったイスラエルの神、主はほむべきかな。」

「ソロモンが王になったのをこの目で見届けることができたので、よかった。」直接には、そのような意味です。でももしそれだけならどうしてダビデは礼拝するのか。不思議なことに、「王は礼拝した」ということばと、アドニヤがソロモンの前に来て「礼をした」というのと、同じことばが使われています。直接には身をかがめるとか、頭を下げるという意味です。

ダビデとアドニヤ、同じしぐさをしています。でも決定的な違いがありました。「私がこの目で見られるようにくださった」とあります。ダビデは、ソロモンのことを通して、やがて来られる救い主を見えています。なぜこのとき救い主が見えるのでしょうか。ダビデがりっぱだったからですか。いいえ。彼はイスラエルの王として、責任をもってやるべきことをやっていたのです。イスラエルの次の王さまを指名しなかった。そのことに

よって、アドニヤが罪を犯すすきを与えてしまい、ソロモンとその母バテ・シェバのいのちが危険にさらされました。このまま行けば、イスラエルの人々が救いを見失っていたかもしれないのです。すべてダビデの罪から起きた出来事なのです。

でも、神はこの出来事に介入し、正しい方向へと導きます。そのため預言者ナタンを遣わし、気がつくとすべてが神のみこころのとおりに決められていきました。ダビデはそんな神のみわぎをまざまざと見ることになりました。ダビデは自分の足りなさ、罪を認めて神の前で頭を下げます。

4) アドニヤにも救いのチャンスを与える

アドニヤはそれとは正反対です。頭を下げても心の内では自分のうちにある悪を認めようとしません。それでも神はあきらめない。アドニヤに救いのチャンスを何度も与えます。

ヨナタンがなぜアドニヤのところに行ったのか。その理由について触れていませんでした。でも今わかります。ヨナタンを差し向けたのはおそらくダビデであったと思われます。たとえ自分に剣を向けるような息子であろうとも、血のつながった息子をダビデは心配しています。早く間違いに気がつき、悔い改めて救われて欲しいのです。ダビデが自分の目で見えた救い主を、アドニヤにも知って欲しいと願っています。

救い主はどのような方でしょうか。十字架の前で自分がいかに罪にけがれた者であるかを認めるとき、主は言ってくる。「あなたははりっぱだ。あなたは絶対に死んではならない。あなたのためにわたしは喜んで、自分のいのちを捨てます。」

死ぬべきなのは、悪を抱えている私たちの方なのです。でも、主が代わりに死んでくださいました。ダビデはそのような救い主を見ました。どこでその救い主を見ましたか。寝台の上です。どこか特別な場所で見るとはいい。動けなくなっている場所。みなさんが今おられる所、そこに救い主がおられます。そこで見ることができると言うのです。主の御名をあがめたいと思います。